

成果と課題

1 各教科・領域の「見方・考え方」について

(1) 成果

○筆者の論の進め方の工夫である「事例の順番」という見方からこの説明文を捉えさせることで、本文の言葉に着目して根拠を述べようと考え方を働かせる姿があった。

国語科：説明文（第6学年）

筆者がどんな思いでこの順番に4つの事例を並べたのか、分かりやすい順番とはどういうことなのか、班で話し合った。子どもたちは、分かりやすい順番に事例を挙げている根拠を、本文の叙述を基に述べる姿があり、筆者の論の進め方の工夫である「事例の順番」という見方からこの説明文を捉えさせることが有効であることが分かった。

○単元を通し、毎日の授業で、数学的な見方・考え方を示したり、気付かせたりすることがその見方・考え方を働かせて問題解決していく子どもの姿の表出につながる。

算数科：かけ算（第2学年）

（一つ分の大きさ）×（いくつ分）＝（いくつ分かに当たる大きさ）で求めることを学習した後、「オナジン」「ヒトツツ」という数学的な見方・考え方を、教師も子どもたちも意識して、常に使っていく、立ち返らせていくことで、子どもたちが 6×2 と 2×6 の乗法の意味の違いの根拠に気付いていった。

また、3つの実践で設定した各教科の「見方・考え方」は以下のとおりである。

国語科：説明文（第6学年）……「事例の順番」

算数科：かけ算（第2学年）……「オナジン」「ヒトツツ」

体育科：マット運動（第3学年）…「する」「見る」「支える」「知る」

(2) 課題

●言葉による見方・考え方を働かせた姿の表出には、教師が文章を捉える視点である見方を設定したら、本文のどの言葉を根拠として着目するかまで想定し、目指す姿を明確にしておく姿を見取ることができる。国語科：説明文（第6学年）

●体育の見方・考え方を働かせた姿の表出には、教師が壁倒立の技のポイント（壁倒立の動きの詳細な過程）や子どもが見付ける技のコツといった壁倒立の動きを、徹底的に分析し、子どもに易しい言葉で明確にしておく必要がある。

体育科：マット運動（第3学年）

●数学的な見方・考え方を働かせた姿の表出には、教師が見方・考え方を式、図や絵と関連付けさせる必要がある。算数科：かけ算（第2学年）

子どもが各教科の見方・考え方を働かせて問題解決をしていく姿の表出には、教師が見方・考え方を設定したら、その見方・考え方を働かせた姿とはどんな姿なのかを具体像まで明確にもち、洗い出す必要があることが分かった。また、見方・考え方は子どもに用いやすい言葉で提示したり、算数科では、式、図や絵などと見方・考え方を関連させたりすることで、より子どもが見方・考え方を活用して問題解決していくことへつながる。そうすることで、授業中、子どもはどんな意識でいるのか、次の発問へ進んでよいか、本時は目標が達成されたのかを教師が見取ることができるようになる。

2 自分事になり得る単元を貫く課題や本時の課題、問い返しの質の向上と話合いの仕方の工夫について

(1) 成果

○ねらいにせまる具体を明らかにする問い返しとペアやグループでの話合い活動の場の設定を行うことで、筆者の意図を明らかにするために、事例の内容や事例と事例の関係を考える姿につながった。**国語科：説明文（第6学年）**

「分かりやすいことから言っている。」という子どもの発言から、分かりやすいを具体で捉えてほしいために「分かりやすいってどういうこと？」と問い返した。児童全員が考えることができるよう、ペアや班かを自分で選び話合いをしてもよいこととした。話している言葉は曖昧で大まかな表現が多かったが、筆者の意図を明らかにするために事例の内容や事例と事例の関係を考えながら、話し合う姿へとつながった。

○体育の見方・考え方を働かせて問題解決していくためには、教師が子どもの技のコツ（児童が見付けた実際の体の動かし方）をより具体的にする問い返しを行うなどの仲介役となることで、技のコツが明確となり、その技のコツを基に、互いにアドバイスし合い、壁倒立を習得していく子どもの姿の表出につながる。**体育科：マット運動（第3学年）**

グループでアドバイスし合いながらの練習がうまくいっていないグループがあった。そこで、「知る」という見方・考え方を活用して問題解決させるために、壁倒立ができた子どもに対し、教師が「どうしてできたの？」と問い返し、具体的な技のコツを引き出し、グループで共有した。その後、その技のコツを基に練習したり、その技のコツを基に子ども同士でアドバイスし合ったりすることができ、壁倒立を習得していく姿へとつながった。

各教科において設定した「見方・考え方」を引き出す際に、問い返しとその後の話合い活動を設定するとよいことは昨年度までの研究からも明らかである。また今回の研修で、全体だけでなく各グループでの問い返しとその後の話合い活動も有効であることが分かり、形態は柔軟にすることで、子どもの目指す姿の実現へつながる。

(2) 課題

- 言葉による見方・考え方を働かせた姿の表出には、子どもの考えに対し、本文の根拠を問う問い返しが必要である。**国語科：説明文（第6学年）**
- 問い返しは、子どもの分からないところや混沌としているところ、分かっているつもりになっているところを焦点付けてから、子どもに投げかける必要がある。また、問い返し後の話合いの場の設定は、話合いのルールが徹底していないと全員理解するための場としては機能しない。分からない同士のペアを救う方法も含め、学級の話合いのルールを徹底させておく。**算数科：かけ算（第2学年）**

国語科では、子どもが◎や問い返しに対する自分の考えを述べる際、本文の根拠はどこなのかを問い返すことで、本文のどの言葉を根拠としたのかという姿を見取ることができ、言葉による見方・考え方を働かせた姿の表出につながる。

問い返しとその後の話合い活動を設定する際には、必要条件がある。問い返しの前に全員が自分の考えをもっていること、子どもの考えを整理し、焦点付けてから問い返しをし、本時のねらいである設定した見方・考え方を働かせて問題解決する姿を引き出せるようにすること、ペアやグループでの話合いのルールを学級全体で共有しておくことである。

さらにその前提条件として、3年実践のように、「シンクロマットの発表会のために、グループで協力して技を練習する」6年実践のように、「論の進め方の工夫を生かして書く（読むと書くをセットにする）」といった単元を貫く問題意識や自分事として捉えることができる単元構成、子どもの追求意欲を高める工夫が必要である。

3 各教科・領域の「見方・考え方」の価値付けの仕方について

(1) 成果

○各教科における見方・考え方を働かせた姿の価値付けには、学びを振り返る場や学んだことを生かす場を設定することで、見方・考え方を働かせて問題解決をする子どもの姿のさらなる表出につながる。

3つの実践において、各教科の見方・考え方を働かせて問題解決している子どもの姿を見逃さず価値付けていく方法として、以下の方法が有効であることが見えてきた。

- ・単元の終末に、見方・考え方を働かせて問題解決したことの価値や良さに目を向けさせる場を設定する。
- ・見方・考え方を掲示物としてまとめ、掲示し、毎時間の授業の導入で活用したり、いつでも子どもがそこに立ち返ったりすることができるようにする。
- ・単元の終末に見方・考え方を働かせないと問題解決できないパフォーマンステストを行う場や見方・考え方を生かして取り組む学びの場（例えば、読む単元を生かして書く単元を行う）を設定する。

各教科・領域において、全ての単元が始まる前に各教科の見方・考え方を設定し、ねらいにせまる問い返しとその後の話し合い活動の設定、価値付けの仕方も考えて単元構成を行うといった、今年度の研修でおいた手立ての3つを全てセットで授業を行うと、各教科・領域の「見方・考え方」を働かせて問題解決していく子どもの姿の表出につながるが見えてきた。

4 最後に

1年間の研修を通し、大切だと思ったことは、今年度有効性を明らかにした3つの手立て以前に、「教師主導ではなく子ども主体の授業づくり」となっているかということである。果たして子どもは、課題に対して問いをもっているのだろうか。問い返しの後、話し合いたいと思っているか、ペアとグループ、どちらの形態で話し合いたいと思っているのだろうか。各教科・領域の見方・考え方を活用したいと考えて問題解決しているか、子どもがやりたいという単元構成になっているか…と、単元に入る前だけでなく、毎時間の授業で、常に子どもの意識を見取り、手立てを打っているだろうか。そこには、教師の正確な見取りと働き掛けが大切である。日々意識して行わないと、難しいことである。このことを根底において、子ども理解に励み、今後の研修や日々の授業改善に臨むことが「共に考えを深め合う子の育成」へとつながっていく。

まずは、3月まで、毎日1時間でも、子どもの意識を大切にした授業を心掛けていく、今年度の研修での学びを生かしていく、ことをしていきましょう。